

内田樹著「下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち」講談社文庫 2009年7月15日刊を読む(II)

わからないことがあっても気にならない

1. おそらく彼女たちはその文字を読み飛ばしているからだと思うんです。
2. この「読み飛ばし能力」が、今の若い人たちは、僕たちの想像を超えるくらいに発達している。ページを開いて、ぱっと見たとき、その読み方がわからない、意味がわからない単語があったときに、それを軽々とスキップする。スキップしてもぜんぜん気にならない。
3. 「スキップする」こと自体は悪いことではないんです。理解できない情報をスキップする能力というのは、実は人間の知性の特徴なんです。機械は「読み飛ばし」ということができません。人間知性と機械的知性の大きな違いは、人間は意味のない情報を無視することができるという点にあります。ですから、これはこれでいいんです。
4. ただ、ふつうは意味がわからない言葉に遭遇するとスキップしようとしても、なんとなく気になる。引っかかる。喉に小骨が刺さる。なんだかわからないものが呑み込めないままに残っていると、気になって気になって仕方がない。「わからないもの」を「わからないまま」にしておくというのは、人間にしかできないことです。というのは、「判断を差し控える」ということは、「理解したい」という欲望を手つかずに持続させ、場合によっては「理解したい」という欲望を^{こうしん}亢進させることだからです。
5. ジャック・ラカンはその知性の働きを夜の海を進む船の航海士に^{たと}喩えています。
6. 夜の海上に何か揺れるものが見えたとします。なんとなく気になる規則的な動きをしている。機械や動物(鮫とか)であれば、その「何か」を既知のものに同定します。機械や動物には「何だか分からないもの」というカテゴリーがありませんから。ですから、とりあえず、「鯨である」とか「難破船である」とか「月の反射である」とか、何かに決定してしまう。というより、機械や動物は決定しないということができないのです。しかし、人間は何かを見たけれどそれが何であるかを決定しないということが出来る。闇夜を航行する航海士は「何時何分、経度何度、緯度何度、しかじかの物を確認す」と航海日誌に書き記すことができる。「それが何を意味するのか分からないものが、ある」ということを受け容れられるのは人間の知性だけです(ジャック・ラカン『精神病(下)』小出浩之他訳、岩波書店)。

7. わからない情報を「わからない情報」として維持し、それを時間をかけて噛み砕くという、「先送り」の能力が人間知性の際立った特徴なわけですが。ところが、この「無純」と書く学生の誤字のありようを見ていると、どうやらその「わからないもの」を「わからないまま」に維持して、それによって知性を活性化するという人間的な機能が低下しているのではないかという印象を受けます。「わからないもの」があっても、どうやらそれが気にならないらしい。

8. 新聞や雑誌を読んでいるとき、知らない言葉に出会うことは僕たちにもよくあります。そして、知らない言葉でも、「知らないままでもいい言葉」と「これは知らないとまずい言葉」の区別ができる。不思議なものですけれど、「これは知らない言葉だけれど、知らないとまずいような気がする」言葉と、「これは知らない言葉だけれど、知らなくても大丈夫」ということの区別がつかます。「知らないとまずい言葉」については、知っていそうな人に「これ、どういう意味なの？」と訊いたり、家に帰ってから辞書を引いたりして、「穴」を埋めてゆく。

9. けれども、今の若い人たちは、その「穴埋め」作業をどうやらしていないらしい。自分がわからない言葉が、あきらかに彼らを読者に想定しているメディアの中に頻出してきても、それが気にならなくなっている。

10. 僕は「わからないこと」より、この「わからないことがあっても気にならない」ことの方に危機の徴候を感知するのです。

P27 ~ 29

[コメント]

本や新聞を読むこと、辞書や漢字書き取り、漢字検定の「意味」や「価値」を本書でしっかりと理解したく思います。是非、御一読を。

— 2015年11月19日 林 明夫記 —